

八溝地域におけるイノシシ囲いワナの消長

新部公亮（県民の森管理事務所）・小川知可子（鳥獣保護管理士）

The Rise and Fall of the enclosed traps for capturing the wild boar in the Yamizo region. Kousuke Niibe, Chikako Ogawa

はじめに

30 年ほど前まで八溝地域の一部で設置されていたイノシシ捕獲用の囲いワナについて、起源や当時の成果、衰退の原因等を、地元の経験者に聞き取り調査を行うことにより、『その消長』を取りまとめ報告する。

また、今後、囲いワナを再開するための各種条件について提案する。

調査方法

八溝地域（図 1）における「囲いワナ」について、起源、消長、成果、運営方法などについて、那須町芦野・大田原市（旧黒羽町）・那珂川町（旧馬頭町）・茂木町青海在住の、囲いワナ猟を経験したことのある猟師から聞き込み調査を行い、それらを取りまとめた。

調査対象者は、[那須地区]・大越 良平氏、相馬氏、[黒羽地区]・岡 昇氏、[馬頭地区]・荒井 平氏、[茂木地区]・小沢 力氏の 4 人である。

質問項目

【起源】

1. なぜこの地区で囲いワナをやるようになったのか？
2. それはいつ頃からか？
3. 最盛期はいつ頃か？
4. いつ頃に廃れてしまったのか？
5. 廃れた原因は何だと思うか？

【設置手法】

6. どういう場所に囲いワナを作ったのか？
7. 現在はどうなっているか？ また現地を案内してもらえるか？
8. 材料は何か？ その資金（賃金も含む）はどうしたのか？
9. どれくらいの人数で作業をしたのか？ また何日間くらいで出来たのか？
10. 扉が開まる仕掛けを教えてください。

【管理手法】

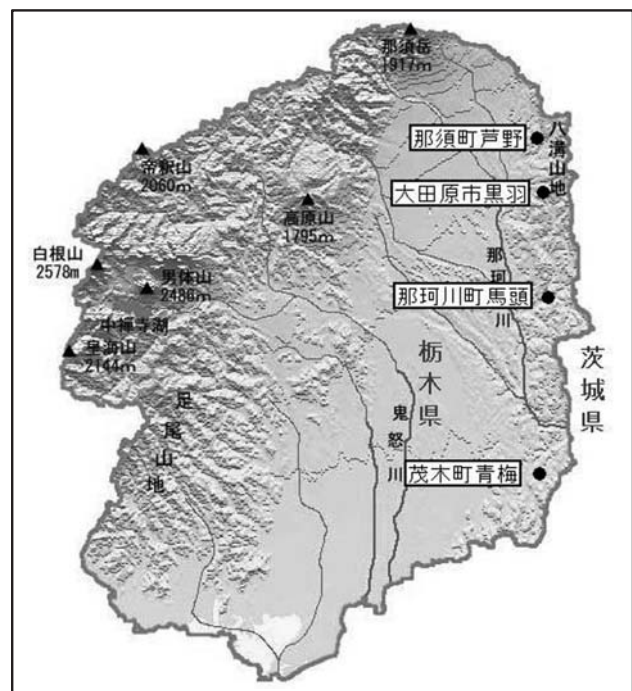


図 1 調査位置（枠内の 4 箇所）

- 1 1. 見回り・エサやりはどうしていたか？
- 1 2. 捕獲出来た場合はどのように捕殺していたか？
- 1 3. 食肉はどのように分配していたか？
- 1 4. 餌（サツマイモ等）の準備方法は？ 苗は春植えか？ 餌のない時期の扉は？
- 1 5. 最高で何頭くらい一度に捕獲できたか？
- 1 6. 囲いワナによる捕獲記録が残っているか？

【今後】

- 1 7. イノシシを捕えるのに、どんな手法が最良と考えるか？
- 1 8. 今後、また囲いワナをやってみたいか？
- 1 9. やれるとなれば、それができる条件は何か？

調査結果

【起源】

1. なぜこの地区で囲いワナをやるようになったのか？

- 〔那須〕 農業被害が出たから。田んぼに入って稲を倒してウリボウに食べさせる。防護柵はしなかった。荒らされたままだった。
- 〔黒羽〕 イノシシが増えた。各部落に補助が出た。馬頭町の大那智に大工さんと代表で作り方を習いに行った。大田原の西田さんが鉄砲を持っていた。犬を使って追い出して捕る方法だったが、当時は無線機がなかったのであまり捕れなかった。その他にカーバイドで脅したりした。電牧（交流電気を使ったもの）も試したが、柵の中に入ってしまうと今度は外に出られなくて中がひどくやられてしまう。とにかく数が多くてどうしようもなかった。ヒッコキワナ（ワイヤー製の胴体をくくるタイプ）をイノシシの通るところに仕掛けると結構かかった。
- 〔馬頭〕 被害が出たから。それ以前は黒羽の雲巖寺辺りにはいた。当時の馬頭町長が要請したからだと思う。
- 〔茂木〕 農業被害が増えたから、イノシシがいたから。

2. それはいつ頃からか？

- 〔那須〕 戦後まもなく始まった。最後は昭和 25～26 年まで《相馬》。オリンピックの前、昭和 35 年頃。40 年前にはまだあった《大越》。
- 〔黒羽〕 昭和 35 年頃からイノシシが現れた。
- 〔馬頭〕 昭和 38 年ごろ。
- 〔茂木〕 50 年くらい前だと思う。

3. 最盛期はいつ頃か？

- 〔那須〕 始めてから 10 年くらいで止めたように思う。
- 〔黒羽〕 昭和 35 年頃。他の集落でも囲いワナを設置していた。しかし 1 基のみで、その後新設したところは当地にしか無かった。
- 〔馬頭〕 始めてから 4～5 年ごろ。

〔茂木〕 約 10 年間で止めた。

4. いつ頃に廃れてしまったのか？

〔那須〕 10 年ぐらいで止めた。スギで作って防腐剤は塗らなかったから（壊れた）。

〔黒羽〕 15～6 年後、昭和 50 年頃。

〔馬頭〕 昭和 50 年代 1 回設置すると 10 年ぐらい持つ。2 回設置した。

〔茂木〕 40 年ぐらい前になると思う。

5. 廃れた原因は何だと思うか？

〔那須〕 狩猟者が増えてイノシシが少なくなった。イノシシの生息密度が高いところでは囲いワナは有効と思う。

〔黒羽〕 会社勤めの人が増えて柵が誤作動したときに直ぐに駆けつけることが難しくなった。扉を引き上げるには 5 人必要（扉をあげる人 4 人、ワイヤーを固定する人 1 人）扉の重量は 100kg 位あった。カラスがいたずらして扉が落ちることが結構あった。

〔馬頭〕 囲いワナの手入れが大変になったから。若い人が勤めに出るようになり、人手が足りなくなった。扉は 4 人がかりでないと上がらない。また、ワナをイタズラする（突っ掛け棒をして扉が閉まらないように細工した）人がいたのも原因。

〔茂木〕 イノシシが売れなくなったから。

【設置手法】

6. どういう場所に囲いワナを作ったのか？

〔那須〕 ここの部落の山が何十町歩もあって、おもに山のふもとに作った。山から下りて来るところが入口。下に田んぼがあった上の畑のところに作った（図 2）。

〔黒羽〕 最初に作ったのは共有地 の道路に接した緩傾斜地の茅場。2 番目は山裾の道路から一段上の平坦地のカキの木（現存する）のそば。3 番目は 2 番目の場所に近い沢状の私有地。小字毎に一つぐらい、全部で 15～16 箇所あった。

〔馬頭〕 大那智 2 箇所、大内地内大室、余ヶ沢、下郷、大河内、森泉地内久通、大波、式部地内細谷、荒沢など全 10 箇所。平らなところや山裾。ワナの入口は下側にし、イノシシの通り道で山から山へ行く途中に仕掛けた。イノシシは山の尾根を下り、沢を登る。



図 2 囲いワナ設置箇所跡地（那須町芦野）

〔茂木〕山の峰の下。昔畑だったところの端に作った。原形が残っているので写真を撮ってきた（図3）。



図3 残存囲いワナの扉付近の状況（茂木町青梅）

7. 現在はどうなっているか。また、
現地を案内してもらえるか？

〔那須〕今はスギを植えている。田んぼの方は残土で埋めてしまった。地主に撤去してくれと言われたから、壊してしまった。

〔黒羽〕1 番目の跡地は土場とスギ人工林、2 番目の跡地は広葉樹林、3 番目の跡地は若齢のスギ人工林になっていた。

〔馬頭〕残っていないので、案内できない。

〔茂木〕新しいといっても 40 年になるので腐っている。

8. 材料は何か。その資金（賃金も含む）はどうしたのか？

〔那須〕材料は個人で伐ったスギを使った。那須町から費用がいくらか出た。大工さんの手間賃は出た。

〔黒羽〕1 番目の材料は補助金が出て森林組合から調達した。3 番目の材料は黒羽の山火事（1970 年）で焼が残った真っ黒な木を切り出して使った。1 番目の作業は勤労奉仕。2 番目以降の材料費の補助は無かった。

〔馬頭〕材料はスギの 5～6 寸の皮付き、長さ 12 尺、先を尖らせてカケヤで 2～3 尺ぶち込んだ。扉の枠は栗の角材 5～6 寸。役場から材料費 10 万円、人件費 10 万円が出た。材料は丸太が 20 石必要。

〔茂木〕材料はぐるり（ワナの周辺）からも伐った。ほかは担ぎ上げた。ヒノキでないとすぐに腐ってしまう。落としこみのゲートの横桟はクリ材の 4 寸角を使った。

9. どれくらいの人数で作業をしたのか？ また何日間くらいで出来たのか？

〔那須〕集落は 30 戸ぐらいあったから、30 人位。

〔黒羽〕1 番目の作業は部落から 30 人くらい出て 1 日で終了。2 回目以降参加者は少なくなった。

〔馬頭〕場所によりけり。道のすぐ脇でないから。10 人ぐらいで、2～3 日ではできない。軟弱な地盤のところでは補助のくいを打ち込んだ。

〔茂木〕希望者を募って作業した。5～6 人で 3 日位かかった。

10. 扉が閉まる仕掛けを教えてください。

[那須] 柵の中の畑の中にロープを十文字にはって扉を吊ってあった。トリガーの方式はバッチメ式（小鳥を捕まえるのと同じ方式）。

[黒羽] シュロ縄を横棒に固定し、シュロ縄にイノシシがひっかかると横棒が下がるので扉を引き上げているワイヤーが外れて扉が落ちる。トリガーの部分は鳥居型をしている。

〔馬頭〕 黒いシュロ綱を 12 方向にはってそれにイノシシが触れるとゲートが落ちるように
なっていた。ゲートはワイヤーロープで固定した。ラッチは鳥居型でモウソウチクの節のあ
るところを利用した（図 4）。

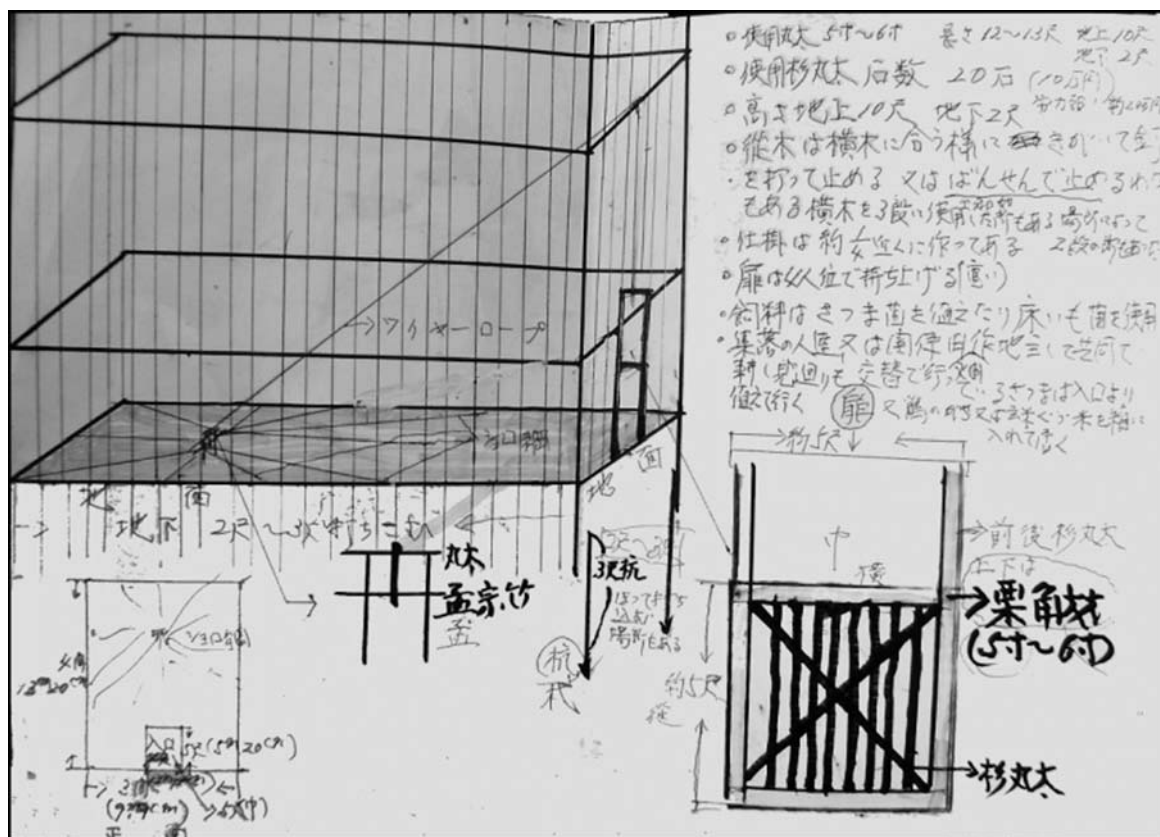


図4 閉いワナの見取り図(馬頭町・荒井力氏作成)

〔茂木〕 黒いシュロ綱を四方にはってそれにイノシシが触れるとゲートが落ちるようになっていた。ゲートはワイヤーロープで固定した。ラッチはチュンチュンワナ（雀を捕るワナ）と同じ仕掛け。

【管理手法】

1.1. 見回り・エサやりはどうしていたか？

[那須] 3 人ぐらいで交代制だった。ワナがあった場所は草刈場への通路ぞいだったので、毎朝草刈に通うときに見ることができた。管理は畑を作っているからエサやりはしない。

[黒羽] 見回りは会員が順番に担当した。エサは柵内にサツマイモを作っていたので秋になってサツマイモが出来るとイノシシがかかる。一度入られるとイモを食われてしまうので別に収穫し

たイモを植え直した。

〔馬頭〕 毎日、交替制でやった。

〔茂木〕 囲いワナの中がイモ畑になっているので餌やりは必要ない。ゲートに赤い旗を付けてゲートが落ちているのを下から見えるように工夫していた。

1 2. 捕獲出来た場合はどのように捕殺していたか。

〔那須〕 柵の間から銃で仕留めた〔相馬〕。ハシゴを掛けて上から撃った〔大越〕。

〔黒羽〕 柵の隙間から鉄砲でぶった。鉄砲を持っている人に頼んだ。

〔馬頭〕 鉄砲で。一時 250 名くらい狩猟者がいたので地域ごとの駆除（捕殺）隊を編成していた。

〔茂木〕 柵の角に登って鉄砲でぶった。ワナ屋はつるし上げて短刀で刺した。

1 3. 食肉はどのように分配していたか。

〔那須〕 イノシシが掛かるとお祭りのようにみんなで食べた。

〔黒羽〕 川で解体して、部落みんなで分け合った。肉のついている骨は公民館で煮てみんなで食べた。鉄砲ぶちにイノシシを丸ごと渡したこともあった（お礼として）。

〔馬頭〕 基本的には集落内で、皆で大盤振る舞い。解体はほかの人がしているのを見て覚えた。各集落に解体できる人がいた。

〔茂木〕 ワナを作ったメンバーで分配した。その他の人に分けることはなかった。仲間に入っていない人にはやっかまれる。小さな個体は下まで運んだ。大きな個体は現地で解体し、肉だけ籠に入れて下ろした。

1 4. 餌（サツマイモ等）の準備方法は？ 苗は春植えか？ 餌のない時期の扉は？

〔那須〕 柵の中はサツマイモ畑にしてあった。

〔黒羽〕 サツマイモが一番好き。昔はイネ、コンニャク、カボチャはあまり食わなかった。竹の子は食わなかった。デントコーンを作っていたときはそれも好きだった。今はイネ、野菜、カボチャ。

〔馬頭〕 囲いワナの中にサツマイモの畑を作った。（苗取り後）の床イモが特に好きだった。箱を作って、その中にニワトリのアラを入れたこともあった。くず米も好き。昨年作ったサツマイモの匂いが残っているのかそれを食べに来ることもあった。

〔茂木〕 囲いワナの中にサツマイモやヤマノイモの畑を作った。

1 5. 最高で何頭くらい一度に捕獲できたか。

〔那須〕 4～5 頭〔大越さん〕、3 頭〔相馬さん〕。

〔黒羽〕 5～6 頭。

〔馬頭〕 6 頭掛ったことがあった。

〔茂木〕 6 頭掛ったことがあった。

1 6. 囲いワナによる捕獲記録が残っているか。

〔那須〕記録はない。

〔黒羽〕ない。

〔馬頭〕残ってない。イノシシが捕れた時は役場に伝えてあるので、記録は（役場に）あるかもしれない。

〔茂木〕なし。

【今後】

17. イノシシを捕えるのに、どんな手法が最良と考えるか。

〔那須〕最良と言われると、いろいろな方法があるので難しい。

〔黒羽〕よく分からない。

〔馬頭〕名射手がいれば銃器が効率よい。箱ワナは掛からない。銃だと当たらないとしても驚くのでしばらくは来なくなる。

〔茂木〕くくりワナが手軽だ。

18. 今後、また囲いワナをやってみたいか。

〔那須〕囲いワナはイノシシの生息密度が高い場合有効。

〔黒羽〕分からない。人出がいれば…。

〔馬頭〕若ければ やってみたい。

〔茂木〕無理だと思う。

19. やれるとなれば、それができる条件は何か。

〔那須〕（誤作動したとき）扉が重くて人的被害の危険が高すぎる。危険だという警告をしなければならぬ。現在はスギの間伐材がたくさんあるし、重機もあるので囲いワナを設置することは容易だ。

〔黒羽〕囲いワナの管理が出来る若い人が何人もいれば可能。

〔馬頭〕丈夫な材料があればやってみたい。

〔茂木〕しし肉が売れば…。

質問項目以外のお話

〔那須地区・大越 良平氏〕

囲いワナは生産組合長、区長が先頭になって設置した。今の子供は山に入って遊ぶことがないからいいけれど、子供が柵の中に入って中のヒモにひっかかり、扉が落ちた場合に、後続の子供が扉に押しつぶされる危険性がある。掛かったイノシシは大きいので30kg。けっこう入った。当時、子供は山へは遊びに行かなかった。

材は4m位。1mは埋めた。柵の穴掘りが大変だった。高さ1mの所と2mの所をボルトで止めた。

昔から出るという話はあったが、子供の頃イノシシはいなかった。イノシシ猟が始まった頃には、鉄砲以外での狩猟の方法が分からなかった。ワナでイノシシが獲れるなんて思わなかった。

一時イノシシが増えた時、静岡の方から狩猟者が来たり、経済的な上り坂になって猟をやる者が増

えた。ワナは自分らが始めた。それ以前はなかった。茨城県大子町に仲間がいて、ワナの免許をとった。

主力でやっていた人はとつくに亡くなってしまった。

〔黒羽地区・岡 昇氏〕

イノシシが獲れると、最初は珍しくて部落中でお祭りのようでみんなで見にいった。最後に獲れた小さいオスは、イノブタを作るための種オスとして利用するために、生きたまま（誰かが）持って行ったが、その試みは失敗したようだ。当時のイノシシは本当のイノシシで油がのっていてウマかった。

囲いワナは一度作ると5年ぐらい持った。ワナ猟をする会員が減ったので、ワナの大きさはだんだん小さくなった。連続して掛かるときは、1ヶ月に1回くらい、ひと秋に2回くらい掛かった。

材料の材木は直径12～3cmくらい（両手で輪を作ったくらい）1丈の長さ。2尺の深さの溝を掘って並べた。材の間隔はこぶし一つ分くらい。地上部は8尺。4隅の柱は太目のものを使った。半割にした材を棧として上下2列5寸釘で固定した。

15～6年前から農地を波トタンで囲った。一時イノシシは減ったが、4～5年前からまた増えてきた。

ワナにかかったイノシシは囲いの中で激しく体当たりするので囲いがしっかりしていないと危険だ。

〔馬頭地区・荒井 平氏〕

被害を減らすにはトタン板を田畑にまわした。着古して汗の染みた山着を細く裂いて火縄にして燃やした。髪の毛を吊るしたこともあった。何日間かは効果があった。

イノシシは地中深くにある筍の芽を掘り当てることができる。イノシシの稲の嗜好はモチ、コシヒカリ、アキニシキの順であり、乳熟期の被害が多い。現在はシカ、ハクビシンの被害がひどい。馬越に昔アライグマ？がいた。カボチャの皮に孔を開けて中を食べる被害があった。

桑畑が放棄されて篠が生えて犬も通れない。「山」が降りてくる感じがする。現在ハンターは40名いるか、いないか。5分の1になった。

イノブタよりイノシシの方が頭がいい。昔のイノシシは今のイノシシとは違って大きさも違う。被害が大きかった。4反歩を3日で荒らした。裏の畑に矢板の人がくくりワナを仕掛けた。獲ってもらったほうがいいから。以前は御亭山まで足跡を探して毎日見て歩いた。今のハンターは山見が出来ない。勢子ひとりとハンター10人ぐらいで上に追い上げて鉄砲を打った。

〔茂木地区・小沢 力氏〕

イノシシはミソ味のなべにして食べた。この囲いワナは戦争時にニューギニアにいた「マチイ」さんが覚えて来て伝えられた。現地ではノブタの捕獲に使われていた。

茂木では檜山に1箇所、その他2箇所囲いワナが設置されていた。

今年はイノシシが少ないので電柵を外しておいたら、イノシシが出て田んぼを掻き回された。イノシシは稲の実が入る頃にやってくる。1ヶ月前に妊娠しているイノシシをくくりワナで捕った。

囲いワナは3.5間の4間の大きさ、高さ11尺、入口のゲートは1間、深さ3尺の堀をぐるりと掘って丸太を立てて作られていた。

昔は「ひっこきワナ」（ワイヤー製の輪の中を胴体がかぐる方式のワナ）で捕まえていたが、一晚経

つとイノシシは死んでしまうので臭くなってしまう。

昔は遠くから「しし肉」を買いに来た。横浜、群馬、益子、笠間などから来た。

茨城県と栃木県にまたがる集落で、個人で囲いワナを仕掛けた人がいた。今は一年中ワナ（くくりワナ）を掛けられるのでイノシシがいなくなった。

（イノシシ猟は）イノシシが採れないから止めた。

まとめと考察

【起源】

1960年～70年にかけて、八溝地域では囲いワナ猟を行っていたことが分かった。開始理由はイノシシによる農業被害が出てきたこと、鉄砲以外の猟の方法は囲いワナによる手法しかなかったからである。茂木地区では、販売目的でイノシシ猟を行っていた。また、行政機関（県・役場）からは補助金が出ており、囲いワナ猟を奨励していたことも分かった。

およそ5年目が最盛期であったが、主に集落内の作業従事者が居なくなり、ワナを管理しきれなくなったこと、また設置したワナの老朽化が進み、腐朽してきたことが原因で廃れて行ったものと考えられる。

【設置手法】

複数の証言から、八溝地域東部の茨城県側に有能な人物（猟師）がおり、県境を越え献身的に囲いワナの設置の指導に当たっていたことが分かった。最初に入ったのは茂木地区、次に馬頭地区と考えられ、黒羽・那須地区のワナはこれらの地区のワナを参考に造られたものである。

ワナの規模は、地形や提供された土地の面積・形状により異なるが、スギ・ヒノキ丸太（直径12cm程度）を用い、1m以上を地中に埋め、地上部は3m、広さは100㎡程度である。また、銃による捕殺のため、丸太と丸太の間にはこぶし大の隙間があった。

材料の丸太切り出しから穴掘り、立て込みに至るまで、すべてが人力で行われており、一箇所のワナを設置するのに20～30人工が必要だった。扉が垂直に落ちる仕掛け（ラッチ）は、黒いシュロ縄がイノシシの脚に絡むことによるものである。

【管理手法】

囲いワナの中にサツマイモを植え、餌でおびき寄せる方法で捕獲していた。日ごとの見回りは輪番制で行っており、捕獲された時には、しし肉を集落内で分け合って食べていた。茂木地区では販売もされており、ワナが廃れた理由に「イノシシが捕れなくなったから」と答えている。

1回の捕獲頭数は4～6頭で、餌の関係で年に1～3回掛かる程度であった。餌のない時期は、誤って扉の落ちる危険性があるため閉鎖していた。

【今後】

どこの地域でも若い労働力が流出しており、囲いワナを管理できる状況にはない。イノシシの密度が高い地域で、日ごろ管理できる人材がいることが囲いワナ猟再開の必須条件である。また、重い扉が垂直に落ちる仕掛けではなく、イノシシ用の頑丈な「観音開き」の扉があれば、安全性も確保でき

るものと思われる。さらに、イノシシ肉を販売できる流通ルートを開拓することにより、地域住民の捕獲意欲も再燃するのではないかと考えられた。

一方、販売ルートが出来、全ての問題がクリアされても、大掛かりな「囲いワナ」には現実味がないので、復活は大変に難しいと考えられる。現実的には、箱ワナやくくりワナによる従来の方法が有効ではないかと思われる。

おわりに

1960 年当時、ワナ設置は集落の住民の協働作業により進められ、材料や労力は補助金のほか、言わば集落の「行事」として実施されていた。イノシシが捕獲されるたびに、お祭りのような「しし肉を食べる会」が開催されていたという。日本社会が高度成長期を経て、村々が限界集落となり、人手が居なくなるとともに、こうした「寄り合い」「地域協力」の和が廃れて行ったことを目の当たりにした。

謝辞

調査にご協力いただいた [那須地区]・大越 良平氏、相馬氏、[黒羽地区]・岡 昇氏、[馬頭地区]・荒井 平氏、[茂木地区]・小沢 力氏には心より感謝申し上げます。